

[論 文]

モンゴル諸語分類法の変化からみた「モンゴル語」

—モンゴル国の国語と内モンゴルの書きことばの関係性—

フフバートル

The Classification of the Mongolian Languages: The Relationship between the National Language of Mongolia and the Written Language of Inner Mongolia

BORJIGIN Huhbator

This paper examines the classification of the Mongolian languages and dialects over time. The paper focuses on the relationship between the national language of Mongolia and the written language of Inner Mongolia. Before the establishment of modern written Mongolian, based on the contemporary concept of “nation”, in the 1910s and 1920s, Russia and Soviet scholars A. D. Rudnev and B. Ya. Vladimirtsov classified all the Mongolian languages as Mongolian dialects without considering the various countries Mongols inhabited. Subsequently, in the early 1950s, Soviet scholar G. D. Sanjeev, influenced by Socialist theories of nationhood, deemed Buryat an independent language due to its history and its relationship with written Mongolian. However, though he did not mention the relationship of modern written Mongolian used in the Mongolian People’s Republic (MPR) and Inner Mongolia, he emphasized that the languages are the same: “Mongolian”, and that since the 15th century their histories have been linked. He also pointed to the relevance of written Mongolian. At the first International Mongolian Studies Conference held in 1959, Mongolian scholar Sh. Luvsanvandan from the MPR, proposed his own model of classification, based on principles of geographical and historical continuity, also taking into the account the possibility of mutual understanding. It was based on classifications by G. D. Sanjeev and N. Poppe, who judged Buryat, Oirat, and Kalmyk to be independent languages. Finally, the author of this paper analyzes the epoch-making classification of Mongolian by scholar D. Tömörtogoo who emphasized the Mongolian written language’s influence on dialects in Mongolia, and classified the Mongolian language of Mongolia as “central Mongolian”, and the Mongolian language of Inner Mongolia as “southern Mongolian”. The scholar based this on the difference in their modern written languages. This paper argues that even if the writing systems of Mongolia and Inner Mongolia are different, the modern written language of Inner Mongolia was formed under the strong influence of the MPR’s written language. The author proposes that “Mongolian” should be classified based on the internal structure of the modern written language.

Key words: *Classification of the Mongolian Languages* (モンゴル諸語の分類), *National Language of Mongolia* (モンゴル国の国語), *Written Language of Inner Mongolia* (内モンゴルの書きことば)

はじめに

20世紀初期モンゴル学が試みたモンゴル語の方言分類にはモンゴル人が分布する国家の違いは反映されていなかった。モンゴル諸語の分類が国別の違いを強く意識させるようになったのは1950年代初めからで、ソ連の学者が同国領内のモンゴル系民族ブリヤートとカルムイクのことはモンゴル語とは別の独立の言語と分類したためであった。それに対し、1959年にモンゴル人民共和国の学者Sh. ロブサンワンダンが第一回国際モンゴル学会で、モンゴル、ブリヤート、オイラドのことは一つの「モンゴル語」として、「中部（モンゴル国のハルハと内モンゴルの中部）」、「東部（内モンゴルの東部）」、「北部（ブリヤート）」、「西部（オイラド）」の4方言に分ける独自の分類法を発表し、異論を立ててきた経緯がある。近代の統一国家内では同一民族と考えられる民族集団の言語の分類は、相互理解可能性等の言語学的手法で行うことが可能であるのに対し、モンゴルのような陸続きで複数の国家に分布する民族の方言分類のあり方は政治的社会的影響が避けられず、分類法の変化には異なる国家ならではの社会的要素の影響が強く反映される。その1つが国語や現代書きことばの影響である。

方言分類は「方言」という自然言語のみを対象とし、人工的要素が加わった国語や現代書きことばの影響を考慮しないのが一般的である。しかし、モンゴル諸語の分類では、特定諸語間の歴史的関係性を示す要素として共通のモンゴル文語を使用していたか、否か、また、ある民族集団を独立の民族したがって、そのことばを独立の言語と見なす根拠として、その民族集団が特定の方言を基礎方言として独自の書きことばをつくっているか、どうかを考慮している場合があった。具体的にはソ連の学者サンジェーエフの分類による「ブリヤート語」がそうであった。そのため、書きことばとの関係で、後述するモンゴル国の学者トゥムルトゴによる分類のように、使用する文字の異同を言語分類の要素として考慮していることもある。

本論ではまず、モンゴル諸語分類の20世紀の歴史や変化について、分類の根拠や特徴から大きく下記3つの時代に分け、その中でモンゴル、オイラド、ブリヤートなど広い意味での「モンゴル語」がどのような理由で、どのように分類されてきたかを、モンゴル文語や現代モンゴル語の書きことばとの関係性から代表的な諸学者の分類について考察する。

- 一. モンゴル文語使用の有無と分布国別を考慮しなかった「モンゴル語方言」分類の時代
- 二. 歴史上の関係や現代の書きことばの違いを考慮した「モンゴル諸語」分類の時代
- 三. 現代の書きことばの独自性を考慮した「中部モンゴル語・南部モンゴル語」の時代

それに先んじて、モンゴル諸族の概要としてモンゴル諸族が分布する国家や地域と人口の状況を概観し、次いで、「モンゴル語方言」分類の時代として、20世紀初期からモンゴル語方言分類を試みたロシア・ソ連の学者A. D. ルードニェフ、B. Ya. ヴラディーミルツォフの分類法と、「モンゴル諸語」分類の時代として、ソ連領内のモンゴル系民族ブリヤートのことは独立の言語として分類したソ連の学者G. D. サンジェーエフの分類法と、それに対し、地理的歴史的連続性と相互理解可能性の原則を強調したモンゴル人民共和国の学者Sh. ロブサンワンダンの主張を分析し、ソ連の分類法とその議論に立ち入ることなく、中国領内のモンゴル語のみ分類した内モンゴルの学者チンゲルタイの分類に言及する。最後に「中部モンゴル語・南部モンゴル語」の時代として、現代モンゴル語の書きことば

がモンゴル国内諸方言に与えた影響を強調することにより、モンゴル国内のモンゴル語と内モンゴルのモンゴル語との相違性を強調したモンゴル国の学者 D. トゥムルトゴの最近の画期的な分類についてその論点を分析する。それを踏まえて本論の焦点として、モンゴル国の国語と内モンゴルの書きことばとの関係性、特に、両者の文字の異同の問題について、モンゴル国の「モンゴル語関連法」上の「モンゴル語」の定義を引き合いに、モンゴル国語、現代モンゴル語書きことばの内的構成要素としての発音、語彙、文法を含む基礎方言、そして、現代の書きことばの重要な要素としての近代語彙、術語、文体、さらに現代文学を含む現代モンゴル語書きことばの形成過程から考察し、「モンゴル語」の再分類への問題提起をする。

一. モンゴル諸族の分布地と人口

前記「広い意味でのモンゴル語」よりさらに広い意味でのモンゴル系諸語を話す人々は現在のモンゴル国、中華人民共和国、ロシア連邦及びアフガニスタンに分布している。現在の人口データからは、モンゴル国を除き、各国、各地域のモンゴル諸族の正確な最新情報を揃えるのは難しい。ここではモンゴル諸族の分布がもっとも広く、人口がもっとも多い中国の2010年の全国人口統計とモンゴル国の2010年のデータを「概数」として利用する。カルムイク語や中国のオイラド方言地帯とブリヤート語、ブリヤート方言地帯の人口データについてはこの10数年以来筆者が現地調査等で把握した情報等に基づいて記述する。

内モンゴル自治区をはじめとして、遼寧省、吉林省、黒龍江省、新疆ウイグル自治区、青海省、甘肅省等に分布する中国領内のモンゴル人は約600万人で、「蒙古族」(モンゴル族)として統計されている。そのほか、中国にはモンゴル系の諸言語を話す民族として、ドゥンシャン(東郷)族約62万人(甘肅省)、モンゴアル(土)族約29万人(青海省、甘肅省)、バオアン(保安)族約2万人(甘肅省)、シラ・ユグル(東部裕固)族約4千人(甘肅省)¹、ダグル(達斡爾)族約13万人(内モンゴル自治区、黒龍江省等)が知られている²。モンゴル諸語の分布状況は「図1」の通りである。アフガニスタンのモゴール人については立ち入らないとし、これらモンゴル諸語を話す人口の中には民族語³が話せない人も多く含まれている。こういう意味では次に見るロシア連邦内のモンゴル諸語の話者の場合も同じであり、モンゴル国の場合は、オイラド系、ブリヤート系の人口統計と実際にそれらの方言を話す人口との隔たりは大きいと推測される。中国の「蒙古族」の人口についても同じことが言えるが、ここでは民族の人口と民族語話者の人口のずれについては言及できない。

ロシア連邦内には1958年までソ連で「ブリヤート・モンゴル」と呼ばれていたブリヤート人約50万人がブリヤート共和国、ウスチオルダ・ブリヤート自治管区、アガ・ブリヤート自治管区などに分布し、カルムイク共和国にはオイラドのことばを基礎にしたカルムイク語を話す約17万人のカルムイク人がいる。

次の「表1」には、本稿の主な議論の対象となる「モンゴル」「ブリヤート」「オイラド」について、分布する国家と地域、国別の人口を記述する。その中で「モンゴル」の「モンゴル国」の人口は上記モンゴル国の人口よりカザフと「オイラド」、ブリヤートの人口を引いた数字で、モンゴル国の関連民族・支族の詳細な人口データは「表1」の下に掲示した資料の2010年の統計による。同じく、「モンゴル」の「中華人民共和国」の人口も上記中国のモンゴル族人口から「オイラド」と「ブリヤート」の人口を引いた数字である。

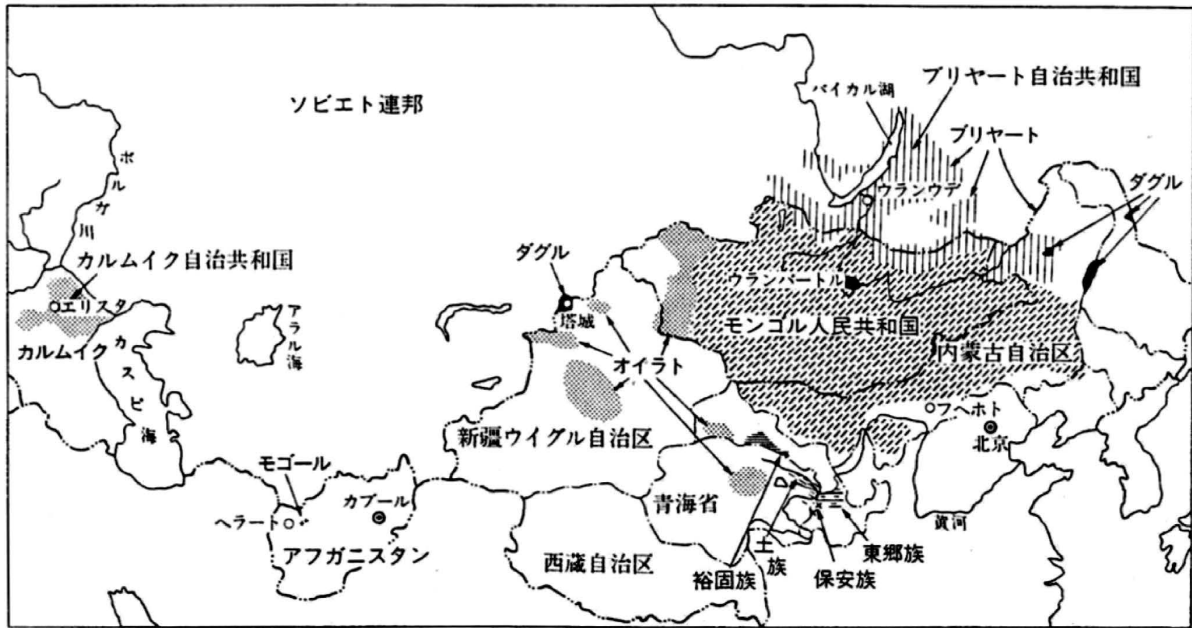


図1 モンゴル諸語分布図

栗林均「モンゴル諸語」三省堂『言語学大辞典』第4巻（世界言語編 下-2）1992年 517頁

表1 モンゴル諸族の分布国家・地域と人口（人口は2010年現在）

民族・支族名	モンゴル諸族								
	モンゴル		オイラト			ブリヤート			
分布国家	モンゴル国	中華人民共和国	モンゴル国	中華人民共和国	ロシア連邦	モンゴル国	中華人民共和国	ロシア連邦	
分布地域	モンゴル国ほぼ全土	内モンゴル自治区・遼寧省・吉林省・黒龍江省等	モンゴル国西部	新疆ウイグル自治区・青海省・甘肅省等	カルムイク共和国	モンゴル国東部・北部	内モンゴル自治区フルンボイル市	ブリヤート共和国・ウスチオールド・ブリヤート自治管区・アガ・ブリヤート自治管区	
人口概数	241万人	571万人	17万人	28万人	17万人	4万人	1万人	50万人	

「中国2010年人口普查資料」<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/6rp/indexch.htm>. Mongol uulsyn ündestnii statistikiin khoroo, Khün am, oron suutsny 2015 ony zavsryn toollogo, negdsen dün, Ulaanbaatar khot, 2016 on. 2008-2011年の現地調査等により筆者作成

二. ロシア・ソ連初期の学者たちの分類法—いずれも「モンゴル語方言」

1. A. D. ルードニェフの分類

モンゴル学におけるモンゴル語方言分類は1911年にロシアのモンゴル語学者A. D. ルードニェフ (A. D. Rudnev 1878-1958) の「東モンゴル諸方言資料」⁴ から始まったことが知られている⁵。ここではア・デ・ルードネフ『蒙古文典』(1919)⁶ の「方言によれる蒙古の区分」からモンゴル語諸方言を現在の地名と方言名を用いてまとめる。ルードニェフはモンゴル語方言を東西の両派に大別し、西方の一派をヨーロッパとアジアに分けている。「ヨーロッパ」はカルムイク方言を指す。東部の一派は五部に分けられている⁷。

西部諸方言：アストラハン等のカルムイク方言、アフガニスタンのモゴール方言、甘粛省のシラ・ユグル方言、新疆、青海、アラシャー、ホブド、フルンボイルのオイラド方言

東部諸方言：一. 南部 (オールドス、チャハル、トゥメド等)、東南部 (ホルチン、ウゼムチン、オンニョード、ヒシグテン等)、北東部 (ゴルロス、ドゥルベド)、ハルハ部 (ハルハ)、北部 (ブリヤート、バルガ・ブリヤート、ダグル)

ルードニェフの分類は、まず文字通りの「モンゴル語の方言分類」である。後記のような歴史的要因や国別で独立の言語としての「モンゴル諸語」という分類はされず、いずれも「モンゴル語方言」という認識であったため、モンゴル文語の有無は分類に考慮されていない。また、「方言によれる蒙古の区分」とあるように、ここでの記述は言語によって地域を区分しているためか、分類には言語学的根拠などが示されていない。この時代はロシアでも後記「社会主義民族」などの近代的「民族」概念は考慮されず、国境線も意識されない分類であった。それに、モンゴル語方言の分布、特に、中国領内でのモンゴル語方言の分布状況がまだほとんど把握されていなかったため、基本的に昔のモンゴル諸部の分布地や行政的区分に基づいた分類になっていると指摘されている⁸。

2. B. Ya. ヴラディーミルツォフの分類

モンゴル文語とハルハ方言の比較研究⁹で知られるソ連の大学者ヴラディーミルツォフ (B. Ya. Vladimirtsov 1884-1931) は、その名著の序論にモンゴル語方言を「東部」と「西部」と大きく2つに分類している。ここでは原著と中国語訳¹⁰を参照に、方言・下位方言名を後述 Sh. ロブサンワンダンのモンゴル語表記に統一するため、ロブサンワンダンのまとめ¹¹から引用する。

西部：1. アストラハンのドゥルベド、アストラハンのトルゴード、ホブドのドゥルベド、バヤド、ザハチン、ミャンガド、アルタイのオリヤンハイ、ダムビー・ワールドのオイラド方言 2. アフガニスタンのモゴール方言

東部：1. ブリヤート方言 (ドード・ウデ、アライル、バルガーン、トゥンヘン、イヒリド、ボルガド、ホダル、ハブサル、オンギ、イデイのブリヤートのバイカル北部諸方言、ホディル、ツォンゴル、バルゴジン、ホリ・ブリヤートのバイカル南部方言) 2. バルガ・ブリヤート方言 3. ダグル方言 4. 内モンゴルの方言 (ハラチン、ジャライド、ドゥルベド、ゴルロス、ナイマン、オンニョード、ホルチン、トゥメド、チャハル、スニド、アバガ、アバハナル、ウゼムチン、ホーチド、オールドス、ドゥルベン・フーヘド、モー・ミャンガン、オラド)

5. ハルハ方言 (本来のハルハ¹², ホトゴイド, ダリガンガ)

ルードニェフの分類に比べて、ヴラディーミルツォフはモンゴル語方言に関する詳しい資料に基づいて分類したことは明らかである。しかし、ヴラディーミルツォフがこの分類を行った際も中国領内のモンゴル語である新疆、青海、甘粛省のモンゴル語に関する情報は不十分で、特に方言構成が複雑な内モンゴルの多くの方言がまだほとんど研究されていなかった¹³。そのため、ヴラディーミルツォフの分類も昔のモンゴル諸部の分布地や行政的区分に基づいて行ったことにより発生したという間違いが指摘されている¹⁴。

ところが、ヴラディーミルツォフのこの著作には、1920年代後半当時のモンゴル人の「共通語」と方言の関係についてたいへん興味深い指摘があった。つまり、ヴラディーミルツォフは、モンゴル語には共通語はまったく存在せず、いわゆるモンゴル語で話すということは、数多くの方言の中のある方言で話すことを意味するとし、もし、ウルガ(ウランバートル)のハルハ人が話すのがモンゴル語なら、同じ理由でアストラハンのカルムイク人、バイカル湖付近のブリヤート人とチベット高原のホショード人が話しているのもすべてモンゴル語であるとみることができると述べている¹⁵。ヴラディーミルツォフのこの論点は当時のモンゴル語、あるいは、現在においても方言学の視点からみれば当然であろう。しかし、現在は、上記のモンゴル語の中でウランバートルのモンゴル語を除き、いずれのモンゴル語もモンゴル国の憲法に示されたモンゴル国の国家公用語としての「モンゴル語」にはなれない。2015年に採択されたモンゴル国の「モンゴル語関連法」で「国家公用語」(töriin alban yosny khel)は、「現代文学モンゴル語」(orchin tsagiin utga zokhiolyn mongol khel)と定義されている¹⁶。この「現代文学モンゴル語」は昔のウルガ、現在のウランバートルを中心とするハルハ方言に基づいてつくられた「モンゴル語」で、ヴラディーミルツォフが上記の指摘をしていた1920年後期は形成の初期段階であったと考えられる¹⁷。実際、ヴラディーミルツォフは1920年代初期のモンゴル国でハルハ方言の要素がモンゴル文語に強く浸透しはじめたことを根拠に、ハルハ方言とモンゴル文語の妥協の産物として現代のモンゴル語文学語(書きことば)が発展すると考えていた¹⁸。

三. G. D. サンジェーエフの新しい分類—ブリヤート語は独立の言語

G. D. サンジェーエフ(G. D. Sanjeev 1902-1982)はブリヤート・モンゴル出身の学者で、「モンゴル語方言問題」¹⁹と名著『モンゴル諸語比較文法』²⁰によるモンゴル諸語の分類が知られている。ここでサンジェーエフはこれまでの「モンゴル語」をモゴール語、ダグル語、モンゴル語、オイラド語、ブリヤート・モンゴル語、モンゴル語の6つの別々の言語に分けている。その背景について、サンジェーエフは、「プラウダ新聞で1950年に言語に関する広い議論が行われてから、モンゴル語、諸方言について歴史の視点から比較研究を行ったわが祖国ロシア、ソ連のモンゴル研究者たちの研究をまったく新しく、マルクス主義に基づいて継続させる大きな可能性が開かれた」²¹と述べている。

これは当時の政治情勢に合わせて書かなければならなかったことであろうが、彼が歴史の視点からモンゴル諸族の関係性を掘りさぐり、その結果をモンゴル諸語の分類に生かしていることは明らかである。ここではまず、「ブリヤート・モンゴル語」を「モンゴル語」とは別の独立の言語として分類するにあたり、サンジェーエフが行った歴史的考察の内容を見る。

それによれば、13世紀の他のモンゴル諸部と比べてブリヤート・モンゴルは遊牧的狀態への移行

過程が緩慢であった。ボラガド、バルゴード、ホリ、イヒリド諸部がすでにモンゴルの一部になっていたが、ブリヤート全体がモンゴルの支配下に入っていなかった。チンギス・ハーンには皮毛の税を払う程度に支配され、チンギス・ハーンと次のハーンによる戦争にまったく参与しなかった根拠や、モンゴルからの時折の侵入に対し、武器を持って抵抗していたという物語があった²²。また、ブリヤート・モンゴルは17世紀初期に志願によってロシアに統合し、その結果、他のモンゴル諸部のように満洲の支配下に入らず、ロシアの文化を学び、次第に農業をするようになって定住的状态に移行した。13-14世紀のブリヤート方言の特徴を述べるのは難しいが、17世紀初期にブリヤート・モンゴルは他のモンゴル諸部とは別に、ブリヤートという総称のもとで1つの民族集団になった。ブリヤート・モンゴル人は文字を知らず、仏教も知らなかった²³。

文字を知らなかったということは、ブリヤート・モンゴルが17世紀初期までモンゴル文語をもっていなかったことを意味し、チンギス・ハーンの時代からウイグル式モンゴル文字をもっていたとされる他のモンゴル諸部とは、この時代までモンゴル文語を共有していなかったことになる。しかし、モンゴル全体にチベット仏教が強く浸透する17世紀半ばころから始まったとされるモンゴル文語発展の第三段階ではオイラド、ブリヤート・モンゴル、モンゴルが相互に孤立することはすでに終わり、また、モンゴル文語がブリヤートとオイラドに「外国語」の状態であったと考えられていた²⁴。

ここで注目すべきは、ロシアの十月革命以降、ソビエト社会主義ブリヤート・モンゴル自治共和国とイルクーツク、チタ両州民族管区のブリヤート・モンゴル人民が新しい社会主義民族になり、その言語がホリ方言に基づく民族語として発展しつつある²⁵と、サンジェーエフが強調していることである。この指摘は、ブリヤート・モンゴルのことばを独立の言語と分類するうえで、他のモンゴル諸部との歴史、文語、宗教上の違いを強調するよりはるかに有効で、これが言語学者であるサンジェーエフの認識や判断で出せるような結論ではなかったことは明らかであった。

サンジェーエフはここでソ連のもう1つのモンゴル系民族自治共和国であったカルムイクの民族と言語には触れていないが、第二次世界大戦中にソ連からドイツに渡り、後にアメリカに移住した著名なアルタイ学者、モンゴル学者N. ポッペ (N. Poppe 1897-1991) がサンジェーエフの分類に「カルムイク」を足した形で、モンゴル諸語を「孤立諸語」(separate languages) と「モンゴル語」に分けて7つの独立言語にしている²⁶。そして、方言の話し手の自称が「モンゴル」なら、そのことばも「モンゴル語」と言えろとし、自称が「モンゴル」になっているのは唯一、内モンゴルの諸部と外モンゴルのハルハ・モンゴルであるという認識を示した²⁷。

そして、サンジェーエフは、モンゴル人民共和国と内モンゴルのモンゴル語の関係については、内モンゴルの民族や内モンゴルにおける現代モンゴル語書きことば(文語学)の形成過程や方向性にはまったく言及せず、内外モンゴルのモンゴル語を一貫して同じモンゴル語と述べている。内外モンゴルが15世紀から政治的に、地理的に離れた状態に入っても言語が別々の独立語にならなかった理由として、それまでの共通のモンゴル語が維持されていたこと及び、共通のモンゴル文語が両者をつなぐ役割を果たしていたと強調している²⁸。

最後になるが、ヴラディーミルツォフがモンゴル文語とハルハ方言との比較をしていたのに対し、サンジェーエフは共通の起源を有する諸言語を比較言語学(comparative linguistics)の視点から研究していたため、比較の対象となる「諸語」としてまず、モゴール語、ダグル語、モンゴオル語を相互に、また、他のモンゴル諸語からも孤立した言語として分類し、オイラド語、ブリヤート・モンゴル語、

モンゴル語との違いとして、相互理解の可能性がないこと及びモンゴル文語を持っていなかったことを取りあげている²⁹。

四. Sh. ロブサンワンダンの分類—サンジェーエフの分類をめぐるの議論

Sh. ロブサンワンダン (Sh. Luvsanvandan 1910-1983) はモンゴル人民共和国の代表的な言語学者で、1959年にウランバートルで行われた第一回国際モンゴル学会で *Mongol khel ayalguuny uchir*³⁰ (モンゴル語の方言問題) という題で発表し、先行研究を踏まえてそれまでのモンゴル諸語の分類法とは大きく異なる分類を行った³¹。ロブサンワンダンは現代モンゴル語の文法を中心に研究してきたモンゴル国「学校文法」の担い手³²であり、方言問題についての研究業績はなかった³³が、1957年に、前掲 G. D. サンジェーエフ「モンゴル語の方言問題」(*Mongol'skie yazyki i dialekty*) をロシア語からモンゴル語に翻訳し、それを『モ露辞典』³⁴の編者として知られる A. ロブサンデンデヴ (A. Luvsandendev) が監修している。訳書のモンゴル語訳名は本発表の題と同じ *Mongol khel ayalguuny uchir* で、内容は、その翌年にソ連科学アカデミーから出版されたサンジェーエフの前記名著『モンゴル語比較文法』の「概論」の部分であった。

その後、ロブサンワンダンの分類は同年中国語(「關於現代蒙古諸語言, 方言的分類問題」)に翻訳され、『北京大学学報』に掲載された³⁵ため、内モンゴルでも早く知られ、本国では、「モンゴル語, 方言の諸特徴や特性を多方面から考察して斬新に分類したモンゴル語, 方言分類の主な基準³⁶であったことが依然としてかわっていない³⁷、また、「モンゴル語方言理論研究の基本的なものさしである」³⁸と高く評価されている。日本では1961年に精松源一によって「現代蒙古諸言語, 方言の分類問題に関して」³⁹と訳され、また、モンゴル語方言分類の主な例として紹介されてきた⁴⁰中で、戦後日本のモンゴル語研究で知られる小沢重男はそれを「蒙古語方言について」と訳し、本論でも見てきた上記学者たちの分類法とは「必ずしも同様ではない」とし、「最も新しく、かつ本国の学者の分類」としてその内容を掲載している⁴¹。そして、「ルブサン・ワンダン教授のこの分類は可成りの妥当性を持っているが、モンゴル系言語の中でも特殊の地位にある方言、例えばダグール方言、モンゴル方言、モゴール方言、さらに最近知られて来たダウンシャン方言、ポーアン方言等について言及がないのは惜しまれる」と記している⁴²。このように、ロブサンワンダンのこの分類が行われた背景と動機、焦点は最近までモンゴル学界であまり知られていなかった。

では、ロブサンワンダンはなぜ、「現代蒙古諸言語, 方言の分類問題に関して」(前掲中国語のタイトルからの翻訳)とも訳しうる課題を取り扱いながらこれらの方言に「言及がな(かった)」のか。

モンゴル国の言語学者たちの最近の研究によれば、ロブサンワンダンの本大会での発表は、ウランバートルで同大会開催の準備をしていたモンゴル国の代表的な学者の1人 B. リンチェンの「公的リクエスト」(*alban khüselit*)によるものであった⁴³。B. リンチェンはタイトルを上記の通り、*Mongol khel ayalguuny uchir* と与え、「モンゴル語がカルムイク語、ブリヤート語などのように分類されているが、その言語学的根拠はどこにあるか、それを出してもらいたい」、「ロシア語がたくさん入ればカルムイク、ブリヤートが独立の言語になるのか。自治共和国だから方言が言語になるのか」とも言った。そして、「本大会に来る学者たちはいずれもモンゴル研究にとって新しい解明となる発表をするので、世界の学者たちの興味を引く、そして、彼らが知らないことについて発表をすることになる。発表の題目、分量について選定できる完全な可能性をあなたに与える」と、北京大学で客員教員として教え

ていたロブサンワンダンに手紙を送った⁴⁴。これらの記述は2016年にウランバートルで出版された *B. Richen alban zakhidal* (B. リンチェンの公的書簡) にも反映されている⁴⁵。

このように、ロブサンワンダンが本発表で孤立諸語に「言及がな」かったのは、B. リンチェンの手紙には名指しがなかったものの、発表の焦点は前述サンジェーエフとポッペの分類において、モンゴル人が「モンゴル語」と意識していたブリヤートとオイラド、カルムイクのことばを「独立の言語」と見なした問題に対する分析と反論にあった。そして、さらに焦点をサンジェーエフの論説に絞ったことは、サンジェーエフの分類に対するロブサンワンダンの次の論点⁴⁶からも明かである。

外モンゴル、内モンゴルとオイラド、ブリヤート・モンゴルは氏族、部族、行政上の違いはあってもずっと交流があり続けてきたため、彼らのことばはモゴール語、モンゴル語のように相互に孤立し、相互理解ができなくなるような状況には至っていない。むしろ、接近したところが少なからず見られる。

B. リンチェンにとっても、ロブサンワンダンにとっても、*Mongol khel ayalguuny uchir* (モンゴル・ヘル・アヤルゴニー・オチル) は、方言分類という学術問題以上に、モンゴル人が直面する深刻な政治問題であった。モンゴル語の *uchir* (オチル) には「わけ、理由、本質、核心」などの意味があり、「モンゴル・ヘル・アヤルゴニー・オチル」というモンゴル語はモンゴル人の直感では「いわゆるモンゴル諸語・モンゴル語方言 (の問題)」とも理解されかねない。もし、このようなニュアンスで理解されるなら、これには単に B. リンチェンやロブサンワンダンの、サンジェーエフの分類に対する「異議」の意味合いにかぎらず、それまでのモンゴル語方言分類における「モンゴル語諸方言」が「モンゴル諸語」にされたことへの「違和感」も含まれていたのではないかと考える余地がある。ただ、ロブサンワンダンは *khel, khelekh khoyoryn uchir* (語と話すことについて、1973年) のように、ほかにも *uchir* をその後論文タイトルに使っている。いずれにせよ、ロブサンワンダンがサンジェーエフの論説について考えるうえで、そして、B. リンチェンがロブサンワンダンにこの「役目を委託する」うえで前記サンジェーエフの「概論」の翻訳作業は一定の意義があったであろう。

ところで、ロブサンワンダンの本発表の趣旨は B. リンチェンが述べたように「世界の学者たちの興味を引く」ことができたのか。日本からの参加者として、戦前からモンゴル語研究で知られていた著名な言語学者服部四郎は「蒙古祖語の母音の長さ」という研究発表のペーパーを提出し、本大会についてのエピソードとして、戦前日本にいた在米ダゴール・モンゴル人学者オノン・ウルグンゲーの勧めで発表を英語からモンゴル語に変えたこと、そして、そのモンゴル文にかなり自信があって *Proceedings* で文字になるのを楽しみにしていたら、2、3年して送られてきたのが誤植・誤りの多い英文の方だったことが本人の回想録で知られている⁴⁷。

しかし、その後、服部とロブサンワンダンは、ロブサンワンダンが求めていた内外モンゴル、オイラド、ブリヤート間の相互理解可能性の根拠を提示する研究でたいへん興味深い接点があった。服部は1998年に『服部四郎論文集』第4巻 (*Studies in Altaic Languages*) を出版するにあたり、それに収録された *A Glottochronological Study of the Mongol Languages* の「付記」に、「ウランバートル国立大学の故 Sh. Luvsanvandan 教授は、どこから手に入れたのか、この表に対し非常に興味をいだかれ、*Mongolian Languages* (Dialects ではない) と言える1つの根拠とすることができる、と言っておられた⁴⁸」と書いた。「この表」というのは服部が昭和34年に行った言語年代学的統計によるモンゴル諸

語研究のデータ表⁴⁹を指し、ロブサンワンダンはそれを生かして、「服部四郎によるモンゴル諸語分離年代についての研究」という論文⁵⁰をモンゴルで発表した⁵¹。ところで、筋としては、服部の「付記」*「Mongolian Languages (Dialects ではない)」*は、その逆で「*Mongolian Dialects (Languages ではない)*」なら意味が理解される。

では、ロブサンワンダンはどのような分類をしていたであろう。彼は1950年代後半に内モンゴルの学者チンゲルタイ（清格爾泰 1924-2013）が行った中国領内のモンゴル語方言調査の資料に基づき、「モンゴル語諸方言」を次のように分類をしていた⁵²。

中部方言：ハルハ下位方言、チャハル下位方言、オールドス方言

東部方言：ホルチン下位方言、ハラチン下位方言

西部方言：新疆オイラド下位方言、ヴォルガ河オイラド下位方言

北部方言：バイカル東部ブリヤート下位方言、バイカル西部ブリヤート下位方言

ロブサンワンダンはこの分類でこの4つの方言以外に、中部方言の影響力の結果として、中部方言と他の方言の間に中間的諸下位方言（zavsryn aman ayalguunuud）が生まれたと強調し、中部方言の話者は人口がもっとも多く、モンゴル語の書きことばを日常的に使用し、文法、語彙において事実上、中部方言が現代モンゴル語の書きことばの基礎になっていると述べている。ここでの「中部方言」は基本的にモンゴル国のハルハ方言を指していると考えられる。ロブサンワンダンのこの「中間的諸下位方言」説はたいへん重要な指摘で、小沢がこれを「過渡的方言」と訳したのはロブサンワンダンの考えにまったく一致すると考えられる。実際、小沢は「この『ハルハ方言』に立脚する現代の文語、即ちキリル文字（ロシア文字）による『モンゴル語』が将来モンゴル民族のいわゆる『標準語』としての位置を占める日が来るではなかろうか⁵³」と述べていた。

こういう意味で、ロブサンワンダンの「中部方言」の構成及び、ハルハ方言の話者を「モンゴル国のハルハと同国オイラド、ブリヤート、ハラチン、ホルチン、バルガ、ウゼムチンのほか、内モンゴルではアバガ、スニド、オラーンツァブ盟ダルハン・モーミヤンガン連合旗、四子王旗北部、シネ・バルガ旗の2つのソムのモンゴル人である」と強調したことは、当時のモンゴル人民共和国と内モンゴルの現代モンゴル語書きことばとの関係を考えるうえでたいへん重要な指摘であった。「中部方言」や「内モンゴルのハルハ方言」ばかりでなく、ロブサンワンダンは、チンゲルタイが中国領内で行ったモンゴル語方言調査の詳細なデータを生かして、モンゴル語方言「広範囲使用語」とハルハ下位方言との一致率について詳しい研究を行っている。それは、ブリヤートとオイラドという「北部方言」と「西部方言」とハルハとの関係及びハラチン、ホルチンという「東部方言」とハルハとの関係を明らかにするためであった⁵⁴。

ロブサンワンダンの本研究におけるチンゲルタイの研究の貢献及びチンゲルタイ自身の分類についてはすでに論じている⁵⁵が、本論の焦点である「モンゴル国の国語と内モンゴルの書きことばの関係性」に関しては、チンゲルタイの分類は中国領内のモンゴル諸語に限定し、ソ連とモンゴル人民共和国との関係性についてはほとんど言及していない。

ロブサンワンダンは、この分類において内外モンゴルの現代書きことばの関係については言及していないが、その後の中ソ対立時代は、内外モンゴルとオイラド、ブリヤートに異なる文字をもつ書き

ことばが形成してもそれが相互理解可能性の障壁にはならないと強調していた⁵⁶。

五. D. トゥムルトゴの画期的分類—モンゴル国のことばは「現代モンゴル語」

ここまで見てきたモンゴル諸語、方言分類についての議論は、基本的に1950年代前半までにおけるモンゴル諸語、方言の状況に基づく分類であった。その後約70年間にモンゴル諸語、方言にどのような変化が起きたのか。それはまず、中ソ対立の時代にロブサンワンタンが指摘していたように、それぞれの国や地域で現代の書きことばが成立し、発達してきたことであった。それは独立国のモンゴル人民共和国を除き、社会主義のソ連と中華人民共和国が国家の統合を目指す基礎教育の普及のため、言語的マイノリティーに民族語としての書きことばをつくりあげる政策を与えた結果であった。カルムイクとブリヤートではそれぞれの基礎方言に基づいてつくられたキリル文字による書きことばが形成され、それまでのモンゴル諸語共通の文語から離れた。内モンゴルでは伝統的なモンゴル文字を使用しながらモンゴル人民共和国の言文一致の新しい書きことばを導入した⁵⁷結果、モンゴル語による教育が普及し、出版、メディアのことばが大きく変わり、方言が崩れはじめた。

そして、21世紀に入った現在ほどの地域でも教育とメディア、新しい芸術文化を通して現代の書きことばや共通語が普及してきたため、方言間の相互理解可能性の問題はあまり意味をなさなくなった。現代社会生活において、モンゴル諸族間のことばの違いへの関心や焦点は方言よりもむしろ、その国や地域、年齢層及び個人のモンゴル語の書きことばや共通語のありかたや能力に移りつつある。実際、モンゴル国の遊牧地でも内モンゴルの農業地帯でも書きことばや共通語の影響を受けていない方言話者はもはや存在しなくなっている。そのため、モンゴル語方言調査分類の画期的な時代であった1950年代に比べ、純粋な方言は存在しなくなっていると考えられ、特に現在のモンゴル国ではハルハ方言を基礎にした現代モンゴル語が全土にわたって高度に普及し、「ハルハ方言」ということば自体が言語学の専門用語になりつつある。したがって、モンゴル国のことば、すなわち、「モンゴル国語」を「ハルハ方言」と呼んで教えてきた日本のモンゴル語教育の考えた方は、従来から「キリル文字によるモンゴル国の書きことばは方言であったのか」、また、「キリル文字は方言文字であったのか」、「方言は『外国語』として教えられるのか」というような一連の疑問を抱えていたことになる。これは「東京のことば（標準語）」を「東京方言」と呼び、また、中国の「朝鮮族」という朝鮮半島南北から移住した「移民少数民族」のことばとしての朝鮮語の（諸）方言を「ソウル方言」と対等に語るような、いわば方言学の盲点に通底している現象であろう。それに対し、中国の「普通話」を「方言」扱いする現象はあまり見られず、「普通話」は定義が基本的に「現代漢語」と一致している⁵⁸。

このように、モンゴル諸語の分類も方言の内的構成の相異による従来の分類法では言語の実態が十分把握できなくなっている。実際、最近のモンゴル諸語、方言分類にもこうした書きことばによる社会的要素がより強く反映されるようになってきている。ここではモンゴル国の代表的な言語学者D. トゥムルトゴ（D. Tömörtogoo 1938-）の比較的最近の分類である「現代のモンゴル諸語とその起源と発展」（Orchin tsagiin mongol khelnüüd, tedgeeriin garal khöggil 1998）⁵⁹について、現代モンゴル語の書きことばや共通語の要素に焦点を当てながら見ることにする。

トゥムルトゴは、本論ではまず分類の基準について、「最近比較的安定的な基準となっている分類法に基づき、現代のモンゴル諸語、方言を次のように分類する。それは主として当該言語、方言の話し手たちの書きことばの独自性を考慮した分類（傍点は引用者による）である⁶⁰」と述べ、モンゴル

諸語を次の11の言語に分類し、それぞれの言語的特徴を記述している⁶¹。

1. モゴール語
2. モンゴル語
3. ドンシャン語
4. バオアン語
5. シラ・ユグル語
6. ダグル語
7. カルムイク語
8. オイラド語
9. プリヤート語
10. 中部モンゴル語
11. 南部モンゴル語

トゥムルトゴは「書きことばの独自性を考慮した分類」という基準については具体的に述べていなかったが、それぞれの言語の記述の中でも「中部モンゴル語」以外はその書きことばについて述べていない。1-6までの孤立諸語は、アフガニスタンのモゴール語が危機に瀕していること、そして、その他の諸語もいずれも中国で「少数民族」であるため書きことばをもたないのは自明であろうが、7-11についてはそれぞれが独自の書きことばを持っているという前提での分類であると考えられる。その際、8のオイラド語の書きことばの場合は、モンゴル国西部では1920年代まで使用され、中国の新疆ウイグル自治区では1980年代に教育を停止されたトド文字による書きことばではなく、現在のモンゴル国と中国領内のモンゴル語の書きことばがそれに該当するのである。

「中部モンゴル語」についてトゥムルトゴは、「モンゴル国内オイラド、プリヤート以外のすべてのモンゴル語話者が話す（中略）。中部モンゴル語の主要方言は現代モンゴル語書きことばの基礎となったハルハ下位方言で、それ以外に、ダルハド、サルトル、ダリガンガなどいくつかの下位方言がある」と記し、さらに、「中部モンゴル語に含まれる諸下位方言は、書きことばとラジオ、テレビなどメディアのことばによって中部ハルハ方言の影響を受け、それぞれの特徴が次第に失われ、その違いがだんだん少なくなっている。このすべてがキリル文字による現代の書きことば（傍点は引用者による）が与えた大きな影響によるものであった」⁶²と指摘し、現代モンゴル語の書きことばがモンゴル国内諸方言に与えた影響について特記し、モンゴル国内におけるモンゴル諸族の諸方言が「一つの統一された言語」になっていること及び、その名称を次のように具体的に示している⁶³。

モンゴル国領内のモンゴル諸族の諸方言は過去の半世紀において書きことばの基礎となった中部ハルハ方言にさらに接近したため、方言の差が比較的少ない一つの統一された言語（negeṅ negdmeḷ khel）（傍点は引用者による）になり、それを現在は「現代モンゴル語」（Orchin tsagiin mongol khel）と呼んでいる。

このように、現代モンゴル語の書きことばの影響を視野に入れ、それを強く強調した分類法はこれまでのモンゴル語方言分類では見られなかった大きな変化であり、こういう意味でトゥムルトゴの分類は新しい時代におけるモンゴル諸語、方言分類では画期的であったと言えよう。ここで注目すべきことは、「現代モンゴル語」（Orchin tsagiin mongol khel）とは特定の時代のモンゴル語ではなく、実際、現在のモンゴル国における法律上の公用語である「国語」を指していることで、前記中国の「現代漢語」と国家通用語である「普通話」との関係と共通である。

次に、「南部モンゴル語」については、中国の内モンゴル自治区をはじめとして、新疆や青海を除く各自治区・省に分布し、チャハル、オールドス、パーリン、ハラチン、ホルチン、ゴルロス、トゥメド、ナイマンなど十数の下位方言があることを紹介している⁶⁴。前記のようにここでは「南部モンゴル語」の書きことばに触れていないため、トゥムルトゴの記述から「中部モンゴル語」と「南部モンゴル語」の書きことばの関係について知ることはできないが、分類の基準に「書きことばの独自性」

が挙げられているため、トゥムルトゴの分類で両者が異なる「モンゴル語」になっている理由の1つとして、まずモンゴル国の書きことばがキリル文字による現代の書きことばであるのに対し、内モンゴルなど中国領内では伝統的モンゴル文字が現代の書きことばに使用されていることが考えられる。これは事実であり、現代の書きことばに対する文字の違い、特に言文一致が達成されているキリル文字と「前近代の文字」⁶⁵である伝統的なモンゴル文字の違いが現代の書きことばに与える影響は大きいと考えなければならない。しかし、文字の違いはモンゴル国と内モンゴルの現代モンゴル語の書きことばにおける表面上の違いである。次節では現代モンゴル語書きことばの内的構成の重要な要素について述べるにあたり、まず両側の文字の異同の問題に焦点を当て、現代モンゴル語の基礎方言の問題にも脚光を与えて論じる。

六. モンゴル諸語、方言分類における書きことばの文字の異同の問題

これまで見てきた通り、モンゴル諸語、方言の分類に書きことばの要素を考慮することは少なかった。本論での議論や主張に限らず、モンゴル諸語、特に前記モンゴル国の「現代モンゴル語」や国家公用語としての「国語」と内モンゴルの現代モンゴル語の書きことばの問題を取りあげた場合、文字の違いが書きことばの違いの重要な要素として強調される傾向がある。モンゴル国には法律における「国語」は存在しないが、本論では、前記「国家公用語」(töriin alban yosny khel)、つまり、「現代文学モンゴル語」(orchin tsagiin utga zohiolyn mongol khel)を「現代モンゴル語の書きことば」、そして、「現代モンゴル語」、「モンゴル国語」、「モンゴル語」を同等のレベルで考えている⁶⁶。なぜならば、モンゴル国では「モンゴル語」は「国家公用語」であり、「国家公用語」の法的定義が「現代文学モンゴル語」であるからだ。しかし、この「現代文学モンゴル語」がキリル文字によるものでなければならぬという定まりはない。

モンゴル国でキリル文字による新文字が使用されはじめたのが1946年からであり、前記ヴラディミルツォフの記述にあったように、モンゴル国における現代モンゴル語書きことばの形成は1920年代からであった。そのため、同国は近代社会への転換のもっとも重要な20数年間は伝統的なモンゴル文字をもって現代の書きことばを形成させてきたことになる。その証として「キリル文字」を意味する「新文字」という名称はモンゴル国で現在も有効であり、内モンゴルでも馴染み深い用語である。それは20世紀前半までモンゴル国が内モンゴルと基本的に共通のモンゴル文語を使用していたことを意味し、1945年以降内モンゴルでも新文字を学習し、使用する努力がなされ、新文字が内モンゴルに公式に導入された⁶⁷結果であった。そして、1950年代初期から現在に至るまでモンゴル国の大量の出版物が内モンゴルでキリル文字からモンゴル文字に転写されて出版されてきた。これは文字がちがっても書きことば自体の語彙や表現、文体が共通であれば、相互の文字に切り替えるだけで障碍なく読めることの証である。1945年以降、モンゴル人民共和国の文学⁶⁸を含む新しい書きことばがほぼそのまま内モンゴルに導入され⁶⁹、中ソ関係悪化までの約15年間にモンゴル人民共和国の書きことばを基盤にした新しい書きことばが内モンゴルで基本的に成立できていたと考えられる。それを可能にしたのは、終戦後の内モンゴルにおけるモンゴル人民共和国への政治的統合の志向と、中ソ友好時代における内モンゴルのモンゴル人民共和国への文化的統合の願望の歴史であった。

ところで、モンゴル国では1980年代末期からの民主化の結果、1990年代初期からモンゴル文字の復活を目指してきた。したがって、もしモンゴル国がモンゴル文字の復活をより強力に進めていたな

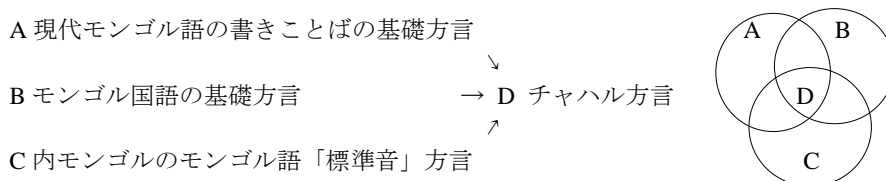
ら、あるいは、2025年からモンゴル文字をキリル文字と併用するというモンゴル国における既定の政策が実施されはじめれば、モンゴル国と内モンゴルとの現代モンゴル語書きことばにおける文字の違いに質的な変化が生じていた、あるいは生じることになる。

このように、両者のモンゴル語書きことばにおける文字の違いの問題は、モンゴル国自体の文字政策により流動的で、モンゴル国のメディアや出版物などにモンゴル文字が眼立って増え、現状としては共通性が増している。このような状況でなくとも、もし文字の異同が書きことばの違いを示す重要な要素になるようであれば、ブリヤート共和国とカルムイク共和国ではキリル文字が使用されているため、それらの共和国のことはモンゴル国語に近いことになるであろう。ブリヤート語とカルムイク語は1930年代からハルハ方言とは大きく異なる基礎方言をもって各自の書きことばをつくりあげてきたため、使用する文字が同じであっても、これら3つのことばを現代の書きことばのレベルで同一の言語とみるには議論の余地がある。実際、現代社会における言文一致の書きことばが大きく変わってきたため、これらの言語は現代生活における話しことばのレベルでも相互理解可能性が低くなっている。ただし、最近ブリヤートやカルムイクでも限定的ではあるが、モンゴル国語が影響を与えているため、将来的にこれらの地域でもモンゴル国語の影響がさらに広がるようなことがあればそれは別の問題であると考え、本論で見てきたブリヤートとカルムイクのことはめぐる議論は、書きことばのレベルにおいても1950年代初期という、それぞれの現代書きことばが十分成立していなかった時代に行われ、実際、相互理解可能性についての焦点は方言、つまり、伝統的な生活における話しことばのレベルで議論が展開されてきた。

以上により、モンゴル諸語における現代の書きことばの違いは、文字の異同よりもそれぞれの書きことばの形成における基礎方言の内的構成の違いが重要であると考えられる。

現代モンゴル語の書きことばの基礎方言はハルハ方言であり、ハルハ方言が内モンゴルにも広く分布していることはチンゲルタイの調査資料に基づくロブサンワンダンの分類の通りである。ロブサンワンダンの分類では、これまで中国領内のモンゴル語「標準音」を担ってきたチャハル方言⁷⁰もハルハ方言とともに「中部方言」を構成し、「中部方言」が現代モンゴル語書きことばの基礎方言になっている。そして、現代モンゴル語書きことばをモンゴル国語と対等に考えるならば、モンゴル国語の基礎方言には、上記「内モンゴルのハルハ方言」⁷¹はいうまでもなく、内モンゴルのモンゴル語「標準音」を担うチャハル方言も含まれていることになる。しがたって、モンゴル国語の基礎方言と内モンゴルのモンゴル語「標準音」地域の方言は、チャハル方言がその両者を担っていることにより部分的に重なることになる。このようなモンゴル国語と内モンゴルの現代モンゴル語（書きことばと話しことば）との関係性は、モンゴル国語とロシア連邦のブリヤート語やカルムイク語には見られない。

上記チャハル方言を、現代モンゴル語書きことば、モンゴル国語、そして、内モンゴルの話しことばとの関係から見れば下記円形図のようになる。つまり、Dチャハル方言は、A現代モンゴル語の書きことばの基礎方言、Bモンゴル国語の基礎方言、C内モンゴルのモンゴル語「標準音」方言のい



れにも該当するため、この図には、モンゴル国語と内モンゴルの現代モンゴル語の書きことばの関係だけでなく、モンゴル国語と内モンゴルの話しことばとの関係性も見られるであろう。

最後になるが、本論で見てきたモンゴル諸族を現代の書きことばの視点から分類すれば、その分布する国家・地域及び、文字、現代文章語（書きことば）、口語（話しことば）、方言は次の「表2」のようになる。

表2 モンゴル諸族の国家・地域、文字、現代文章語、話しことば、方言一覧表

諸族	モンゴル		オイラド			ブリヤート		
	モンゴル国	中国内モンゴル自治区等	モンゴル国	中国新疆ウイグル自治区等	ロシア連邦 カルムイク共和国	モンゴル国	中国内モンゴル自治区フロンボイル市	ロシア連邦 ブリヤート共和国等
国家・地域	モンゴル国	中国内モンゴル自治区等	モンゴル国	中国新疆ウイグル自治区等	ロシア連邦 カルムイク共和国	モンゴル国	中国内モンゴル自治区フロンボイル市	ロシア連邦 ブリヤート共和国等
文字	キリル	モンゴル	キリル	トド モンゴル	キリル	キリル	モンゴル	キリル
現代の文章語	現代モンゴル文章語		カルムイク語			現代モンゴル文章語		ブリヤート語
口語	現代モンゴル語・モンゴル語諸方言	内モンゴルのモンゴル語諸方言・現代モンゴル語	現代モンゴル語・オイラド諸方言	オイラド諸方言・現代モンゴル語	カルムイク語・オイラド諸方言	現代モンゴル語・ブリヤート方言	モンゴル語諸方言・現代モンゴル語・ブリヤート方言	ブリヤート語・ブリヤート諸方言
方言	ハルハ方言等	チャハル方言等	ドウルベド方言等	トルゴード方言等	トルゴード方言等	ホリ方言等	アガ方言	ホリ方言等

「モンゴル諸語分類法の変化からみた『モンゴル語』—モンゴル国の国語と内モンゴルの書きことばの関係性—」2022年 フフバートル作成

まとめ

本論ではモンゴル語方言・モンゴル諸語の分類の変化の中で「モンゴル語」がどのように分類されてきたかを、モンゴル国の国語と内モンゴルの書きことばの関係性という視点から見てきた。近代的「民族」や「国家」概念の浸透による現代書きことばが成立する以前、1910、20年代にロシア・ソ連の学者A. D. ルードニェフとB. Ya. ヴラディーミルツォフが行ったモンゴル語方言分類は、モンゴル

話者が分布する国別とモンゴル文語の有無を考慮せず、分類の対象をいずれも「モンゴル語方言」とした。次いで、1950年代初期にソ連の学者 G. D. サンジェーエフはモンゴル諸語間の関係性に歴史と文語の視点も入れ、社会主義民族論によりブリヤート・モンゴルのことばを独立の言語と見なしたが、モンゴル人民共和国と内モンゴルの現代の書きことばの関係性についてはまったく言及せず、内外モンゴルのことばが同一の「モンゴル語」であることを15世紀以降の歴史とモンゴル文語のつながりによって強調した。1959年に第一回国際モンゴル学大会でモンゴル人民共和国の学者 Sh. ロブサンワンダンが行った研究発表の内容は、地理的歴史的連続性と相互理解可能性の原則からブリヤート、オイラド、カルムイクのことばを独立言語にしたサンジェーエフと N. ポッペの分類についての分析と反論及び自らの新たな分類法であった。本論ではモンゴル語方言・諸語分類の変化におけるサンジェーエフとロブサンワンダンの分類の位置づけに対し比較的多くの紙幅を割いた。最後に、現代モンゴル語の書きことばがモンゴル国内諸方言に与えた強い影響を強調することにより、モンゴル国内のモンゴル語と内モンゴルのモンゴル語を「中部モンゴル語」と「南部モンゴル語」に分類したモンゴル国の学者 D. トゥムルトゴの画期的な分類の焦点について分析した。それを踏まえて結びに、モンゴル諸語、方言分類における書きことばの文字の異同の問題に焦点を絞り、基礎方言の重要性に脚光を与え、終戦後の内モンゴルのモンゴル人民共和国との政治的統合志向および、中ソ友好時代における内モンゴルとモンゴル人民共和国との文化交流の歴史の中で成立しはじめた内モンゴルの現代モンゴル語書きことばの内在的構成要素に基づき、「モンゴル語」を再分類するための問題提起を行った。

参考文献

日本語・中国語

ア・デ・ルードネフ 山口茂一訳『蒙古文典』東京（非売品）1919年

荒井幸康『「言語」の統合と分離 1920-1940年代のモンゴル・ブリヤート・カルムイクの言語政策の相関関係を中心に』三元社 2006年

小沢重男『モンゴル語の話』大学書林 1982年

栗林均「モンゴル語」三省堂『言語学大辞典』第4巻（世界言語編 下-2）1992年

栗林均「モンゴル諸語」三省堂『言語学大辞典』第4巻（世界言語編 下-2）1992年

田中克彦『言語の思想—国家と民族のことば』日本放送出版協会 1975年

服部四郎『蒙古とその言語』（文化科学叢書）湯川弘文社 1943年

服部四郎『服部四郎論文集』第4巻（*Studies in Altai Languages*）三省堂 1998年

フフバートル「内モンゴルにおけるモンゴル語の文字改革の問題—終戦後のモンゴル人民共和国『新文字』の影響を中心に—」『学苑』No. 880 2014年 1-15頁

フフバートル「内モンゴルにおける『現代モンゴル語』の形成過程とその政治的側面—モンゴル人民共和国からの影響に焦点を当てて—」『学苑』No. 883 2014年 1-22頁

フフバートル「内モンゴルにおけるモンゴル人民共和国文学の受容—20世紀前半のモンゴル語定期刊行物の資料を中心に—(上)」『日本モンゴル学会紀要』No. 44 2014年 67-79頁

フフバートル「内モンゴルにおけるモンゴル人民共和国文学の受容—20世紀前半のモンゴル語定期刊行物の資料を中心に—(下)」『日本モンゴル学会紀要』No. 45 2015年 55-66頁

フフバートル「少数民族語から見た中国の『国家語』名称—『国家公用語』名としての『普通話』の可能性—」『学苑』No. 820 2009年 59-72頁

フフバートル「モンゴル国の言語法と現代モンゴル文章語—モンゴル国『国家公用語』定義用語についての分析—」

- 『東洋文化研究所紀要』第173冊 2018年 73-74頁
- フフバートル「モンゴル文語とモンゴル語の言文一致の問題—『前近代』の文字を使い続ける内モンゴルの言語
範—」『学苑』No. 964 2021年 12-27頁
- フフバートル「モンゴル語の方言分類にみることばと民族—モンゴル人学者 Sh. ロブサンワンダンの分類を中心に—」
『学苑 昭和女子大学紀要』No. 968 2022年 1-19頁
- 桑席葉夫著 陳偉等訳『蒙古語比較語法』民族出版社 1959年
- 符拉基米爾佐夫著 陳偉, 陳鵬訳 潘成明校『蒙古書面語与喀爾喀方言比較語法』青海人民出版社 1988年

モンゴル語・欧文

- Bayatur, D., erkilen nayirayulba, *Mongγul kelen-ü nutuy-un ayalayun-u qubiyarilalta-yin sudulyan*, Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin keblel-ün qoriy-a, 2017.
- Bayančoytu, *Nutuy-un ayalayun-u sinjilel*, Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 2007.
- Čenggeltei, Dumdadu ulus taki mongγul törül-ün kele ayalayun-u yerüنگkei bayidal, Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin mongγul kele bičig sudulqu γajar nayirayulba, *Kele bičig-ün erdem sinjilegen-ü ögülel-ün tegübüri*, qoyadyar debter, Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin keblel-ün qoriy-a, 1986.
- Luvsanvandan, Sh., *Orchin tsagiin Mongolyn utga zokhiolyn khelnii ontslog ni*, 1953. “Shinjlekh ukhaan” setgüül, No. 2, pp. 43-50 (Mongol ulsyn ikh surguuli Mongol khel, soyolyn surguuli, *Shadavyn Luvsanvandan Buteeliin Chuulgan*, IX boti, *Khelshinjleliin onolyn asuudal*, Ulaanbaatar, 2010).
- Luvsanvandan, Sh., *Mongol khel ayalguuny uchir*, 1959. Olon ulsyn mongolch erdemtediin ankhdugaar ikh khural (Mongol ulsyn ikh surguuli mongol khel, soyolyn surguuli, *Shadavyn Luvsanvandan Buteeliin Chuulgan*, VI boti, Mongol khelnii Avia Sudlal, Ulaanbaatar, (2010).
- Luvsanvandan, Sh., *Orchin tsagiin Mongol khelnii züi*, (erönkhii redaktor), Ulaanbaatar, 1966.
- Luvsanvandan, Sh., *Khel zokhiol*, IY boti, 1967, (Mongol ulsyn ikh surguuli mongol khel, soyolyn surguuli, *Shadavyn Luvsanvandan Buteeliin Chuulgan*, IX boti, *Khelshinjleliin onolyn asuudal*, Ulaanbaatar, 2010.)
- Öbür mongγul-un yeke surγayuli-yin dumdadu ulus-un kele bičig udq-a Jökiyal-un salburi-yin mongγul kelen-ü tasuy nayirayulba., *Odu üy-e-yin mongγul kele*, degedü debter, douradu debter Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1964.
- Poppe, N., *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955 (Second impression: Helsinki 1987).
- Purevjav, E., *Ikh erdemten akademich Shadavyn Luvsanvandan*, Ulaanbaatar, 2010.
- Rinčin, B., *Mongγul bičig-ün kelen-ü jüi*, terigiin debter, Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1990.
- Sanjeev, G. D., *Mongol'skie yazyki i dialekty*, -Uchenye zapiski Instituta vostokovedeniya AN SSSR, M, t. IV, Str. 30-125, 1952.
- Sanjeev, G. D., *Mongol khel ayalguuny uchir*, BNMAU Shinjlekh ukhaany khüreelen, Ulsyn khevleliin gazar, Ulaanbaatar, 1957.
- Sanjeev, G. D., *Sravnitel'naya grammatika mongol'skikh yazykov*, Akademiya nauk SSSR Institut narodov azii, Izdatel'stvo, “Nauka”, Moskva, 1953 (1964).
- Shinjlekh ukhaany akademi khel zokhiolyn khüreelen, *B. Richen alban zakhidal*, Ulaanbaatar, 2016.
- Tsoloo, J., Akademich Sh. Luvsanvandan bol mongol khel shinjleliin ukhaany nutgiin ayalguuny onolyn sudalgaany ünsen khemjigdekhüün mön, J. Tsoloo, *Mongol khelnii nutgiin ayalguu sudlal (Mongol ulsyn shinjlekh ukhaan*, XI boti) pp. 14-23, Ulaanbaatar, 2009.
- Tömörtogoo, D., *Mongol khelshinjleliin onol, tüükhiin asuudaluud*, Ulaanbaatar, 2002.
- Tömörtogoo, D., Mongol khel shinjlel, Shadavyn luvsanvandan (E. Purevjav, L. Manaljav naryn khamt) (*Mongol*

ulsyn shinjlekh ukhaan, VI boti), Ulaanbaatar, 2005.

Vladimirtsov, B. Ya., *Sravnitel'naya grammatika mongol'skogo pis'mennogo yazyka i khalkhaskogo narechiya. Vvedenie i fonetika*, 1929. Izdanie 2-e, Moskva, "Nauka", lavnaya redaktsiya vostochnoj literatury, 1989.

注

- 1 裕固族は全人口 14,378 人中、チュルク系の言語を話す西部裕固族が約 1 万人で、モンゴル系の言語を話す東部裕固族が約 4 千人と考えられている。
- 2 モンゴル諸語名称のカタカナ表記は、三省堂『言語学大辞典』第 4 卷（世界言語編 下-2）1992 年（517-526 頁）栗林均「モンゴル諸語」の表記に統一する。方言や下位方言名はその限りではなく、以前から日本で定着しているものを除き、基本的に現代モンゴル語キリル文字正書法に基づく。
- 3 これらの民族は母語に基づく書きことばをもたないため、ここで「民族語」は口語としての「方言」を表すが、中国の「民族教育」における「民族語」は実質的に少数民族の書きことばを指す。本文で「民族語」は多くの場合、現代の書きことば（文学語）を意味する。
- 4 Rudnev, A. D., *Materialy po govoram vostochnoj Mongolii*, S-Peterburg, 1911.
- 5 服部四郎, 1943 年, 198-200 頁。
- 6 ア・デ・ルードネフ 山口茂一訳, 1919 年。
- 7 ア・デ・ルードネフ 山口茂一訳, 1919 年, 16-17 頁。
- 8 Luvsanvandan, Sh., 1959 (2010), p. 46.
- 9 Vladimirtsov, B. Ya., 1929.
- 10 符拉基米爾佐夫著 陳偉, 陳鵬訳 瀋成明校, 1988 年。
- 11 Luvsanvandan, Sh., 1959 (2010), pp. 46-47.
- 12 Sobstvenno khalkhaskaya, Vladimirtsov, B. Ya., 1929, p. 9 (モンゴル語からの引用者)。
- 13 Sanjeev, G. D., 1957 (Sanjeev, G. D., 1952 のモンゴル語訳) p. 4, p. 9, p. 62.
- 14 Luvsanvandan, Sh., 1959 (2010), p. 47.
- 15 符拉基米爾佐夫著 陳偉, 陳鵬訳 瀋成明校 1988 年, 6-7 頁。
Vladimirtsov, B. Ya., 1929, pp. 3-4.
- 16 用語やその定義についての詳細は「フフバートル, 2018 年, 73-74 頁」を参照されたい。
- 17 フフバートル, 2021 年, 13 頁。
Khökhbaatar., Orchin tsagiin mongol khel bürelden togtokhod Ts. Damdinsürengiin oruulsan khuvi nemer: Tüükhiin niigem khel shinjleliin üüdnees, *Mongol ulsyn töriin gurban udaagiin shagnalt, ardyn uran zohiolch, akademich Tsendiin Damdinsüren*. Ulaanbaatar, 2019, pp. 228-232.
- 18 Sanjeev, G. D., 1957, pp. 73-74.
- 19 Sanjeev, G. D., 1952 (Sanjeev, G. D., 1953.), Sanjeev, G. D., 1957.
- 20 Sanjeev, G. D., 1953. 1964. 桑席葉夫著 陳偉等訳, 1959 年。
- 21 Sanjeev, G. D., 1957, p. 3.
- 22 Sanjeev, G. D., 1957, pp. 9-10.
- 23 Sanjeev, G. D., 1957, pp. 10-11.
- 24 Sanjeev, G. D., 1957, p. 18.
- 25 Sanjeev, G. D., 1957, p. 10.
- 26 Poppe, N., 1955 (1987).
- 27 Poppe, N., p. 19.
- 28 Sanjeev, G. D., 1957, p. 14.

- 29 Sanjeev, G. D., 1957, pp. 7-8.
- 30 Luvsanvandan, Sh., 1959 (2010), Sanjeev, G. D., 1957 と同名。
- 31 この議論の詳細はフフバートル, 2022 年, 1-19 頁に譲る。
- 32 フフバートル, 2014 年, 3 頁。
- 33 Purevjav, E., 2010, pp. 124-127.
- 34 Luvsandendev, A., *Mongol'sko-russkii slovar'*, Moskva, 1957.
- 35 羅布桑旺丹「關於現代蒙古諸語言, 方言的分類問題」『北京大學學報: 人文科學』(1959: 3)。
- 36 Tömörtogoo, D., 2005, p. 99.
- 37 Purevjav, E., 2010, p. 35.
- 38 Tsooloo, J., 2009, pp. 14-23.
- 39 大阪外國語大學モンゴル語研究室 1961 年。
- 40 小沢重男, 1982 年, 112-113 頁。栗林均, 1992 年, 518-519 頁。
- 41 小沢重男, 1982 年, 112-113 頁。
- 42 小沢重男, 1982 年, 113 頁。
- 43 Purevjav, E., 2010, p. 35.
- 44 Tsooloo, J., 2009, p. 14.
- 45 Shinjlekh ukhaany akademi khel zokhiolyn khüreeleen, 2016, pp. 62-63.
- 46 Luvsanvandan, Sh., 1959 (2010), p. 48.
- 47 服部四郎著『一言語學者の隨想』汲古書院 1992 年, 432-433 頁。
- 48 服部四郎, 1998 年, 88 頁。
- 49 服部四郎, 1998 年, 87 頁。
- 50 Luvsanvandan. Sh., Shiro Khattori mongol khelnüüdiin salsan onyg sudlakh ni, *Khel zokhiol*, IY boti, 1967, 170-174 (Mongol ulsyn ikh surguuli Mongol khel, soyolyn surguuli, *Shadavyn Luvsanvandan Büteeliin Chuulgan*, IX boti, *Khelshinjileiin onolyn asuudal*, Ulaanbaatar, 2010, pp. 71-75).
- 51 詳細はフフバートル, 2022 年, 1-19 頁に譲る。
- 52 Luvsanvandan, Sh., 1959 (2010), pp. 58-59.
- 53 小沢重男, 1982 年, 111 頁。
- 54 フフバートル, 2022 年, 12-14 頁。
- 55 フフバートル, 2022 年, 8-10 頁。
- 56 Luvsanvandan, Sh., 1966, p. 7.
- 57 フフバートル, 2021 年, 21-22 頁。
- 58 フフバートル, 2009 年, 64 頁。
- 59 Tömörtogoo, D., Orchin tsagiin mongol khelnüüd, tedgeeriin garal khögjil, 1998, *Mongol khelshinjileiin onol, tüükhiin asuudalud*, Ulaanbaatar, 2002.
- 60 Tömörtogoo, D., 2002, p. 46.
- 61 Tömörtogoo, D., 2002, pp. 46-58.
- 62 Tömörtogoo, D., 2002, p. 57.
- 63 Tömörtogoo, D., 2002, p. 46.
- 64 Tömörtogoo, D., 2002, p. 57.
- 65 フフバートル, 2021 年, 16-19 頁。
- 66 フフバートル, 2018 年, 61 頁。
- 67 フフバートル, 2014 年, 1-15 頁。

- フフバートル, 2021年, 19頁。
- 68 フフバートル, 2014年 (『日本モンゴル学会紀要』No. 44), 67-79頁。
フフバートル, 2015年, 55-66頁。
- 69 フフバートル, 2014年 (『学苑』No. 883) 2014年, 1-22頁。
- 70 内蒙古自治区蒙古語文工作委員会文件 (内語発 [1981] 25号「關於推广蒙古語標準音的宣傳要点」(内蒙古自治区蒙古語文工作委員会 1981年11月16日))。
- 71 日本でもこのような分類がある (栗林均「内蒙古語」三省堂『言語学大辞典』第2巻 世界言語編 中, 1989年, 1429頁)。

本論文は独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究(C)研究課題番号: 18k00586「現代モンゴル語書きことばの形成」) による研究成果の一部である。

(フフバートル 現代教養学科)